

研究推進ニュースレター



東京未来大学
研究推進委員会発行
2019年3月31日発行

ご挨拶

冷たく乾いた大陸の風が、温もりと潤いを帯びた海の風になると、イギリスでは春の到来です。四月の雨と西風は、厳しい冬を耐え忍んだ草木を芽吹かせ、里山の景観を新たな彩りに染めます。手入れが行き届いた雑木林の明るい林床は、一面、咲き誇るブルーベルの青い絨毯で、幻想的な世界に変わります。東京でも、そろそろ桜の見頃となりました。春です。新年度の更なる稔りを祈りつつ、最新号をお届けします。

2018年度研究推進委員長 宅間雅哉

科研費ニュース

平成31（2019）年度東京未来大学の科研費申請状況は以下の通りです。

| | | 平成31年度 | | | | | | 平成30年度 | | | | | |
|---------|--------|----------------|--------|-------------|--------|------------------|--------|----------------|--------|-------------|--------|------------------|--------|
| | | こども (保育・教育) | | こども (心理) | | モチベーション 行動科学部 | | こども (保育・教育) | | こども (心理) | | モチベーション 行動科学部 | |
| 基盤研究(B) | 一般 | 2 | 24,854 | 0 | 0 | 1 | 11,570 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 海外学術調査 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 基盤研究(C) | 一般 | 4 | 10,238 | 3 | 13,537 | 4 | 13,881 | 5 | 18,625 | 2 | 8,250 | 5 | 15,126 |
| | 特設分野研究 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 挑戦的研究 | 開拓 | 0 | 0 | 1 | 5,180 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5,085 | 0 | 0 |
| | 萌芽 | 3 | 12,783 | 0 | 0 | 1 | 4,820 | 0 | 0 | 1 | 4,433 | 1 | 5,000 |
| 若手研究(A) | | | | | | | | | | | | | |
| 若手研究(B) | | 2 | 5,821 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 14,158 | 0 | | 1 | 4,721 |
| 件数 / 金額 | | 11 | 53,696 | 4 | 18,717 | 6 | 30,271 | 10 | 32,783 | 4 | 17,768 | 7 | 24,847 |
| 合計件数 | | 21件 | | | | | | 21件 | | | | | |
| 合計金額 | | 102,684 (千円) | | | | | | 75,398 (千円) | | | | | |

平成30（2018）年度と比較すると、申請の合計件数は同じですが、合計金額が増加しています。これは、基盤研究(B)・基盤研究(C)といった比較的大型の申請が増えたことが関連していると言えるでしょう。近年、申請件数が増え、採択率も向上しましたが、本学の教員数からすれば、まだ顕著な伸びとは言えません。来年度は、さらに申請件数が増えることを期待したいところです。

ご自身の研究に合った種目を検討し、申請してください。詳しくは、日本学術振興会ウェブサイト内の科学研究費助成事業（科研費）の制度概要、「研究種目・概要」ページをご覧ください。

https://www.jspss.go.jp/j-grantsinaid/01_seido/01_shumoku/index.html

次年度科研費スケジュールと要領の詳細はまだ発表されていませんが、例年通りですと、9月には日本学術振興会HPで告知されると思いますので、ご確認ください。参考として、今年度のスケジュールを以下に示します。

- * 公募開始：2018年9月1日
- * 学内期限：2018年10月16日（火）17時
- * 提出期限：2018年11月7日（水）16時30分（厳守）

新企画：地域貢献・地域連携から発展した研究業績

足立区を中心とした地域貢献・地域連携は、東京未来大学の大きな特色の一つです。今回は新企画として、こうした活動が出発点となって研究業績に発展したケースをインタビュー形式で紹介いたします。記念すべき第1回は執行智子先生にお話を伺いました。

Q1：執行先生、出発点となった地域への働きかけはどのようなものでしたか。

3年前に本学に着任し、足立区立小学校へ教員研修の講師としてお邪魔したときに、足立区の英語教育の実態について初めてお話を伺いました。東京都内でも各区市によって英語教育の進捗状況は様々ですが、足立区立小学校には他区とは異なるいくつかの点がありました。外国語指導助手（ALT）がいないこと（Japanese Teacher of Englishは派遣されています）、常設された英語の教材がないこと、デジタル教科書を使うためのPCがないことです。この状況の中で担任の先生方が一週間に1回の外国語活動に一生懸命取り組んでいらっしゃる姿に大変感銘を受けました。他区ではALTの派遣会社に委託しALTと担任の先生がチーム・ティーチングで外国語活動を行っている場合が多いのです。ですから、英語を専門としない担任の先生方用の英語研修が足立区では一番必要だと強く思いました。



Q2：その後、どのように研究につながり、発展していったのでしょうか。

教員研修は本学に着任する以前から講師として関わっておりましたが、主にALTと担任の先生のチーム・ティーチングを想定している研修が多かったです。一方、私が所属している研究会では、内容重視型の外国語教育を研究しておりました。これは、学習言語の語彙や文法を直接学習するのではなく、その言語を使って内容を学習することを第一目標とし、その際そこで使用した言語を、内容を伴った形で学ぶという考え方の外国語教育です。日本の中学高校で行われている英語教育はまだ文法重視や訳読が多く、小学生の認知的発達に合うものではありません。そのような英語学習経験を積んできた小学校の担任の先生方が、小学生の発達に合わせた外国語活動をするのは至難の業です。英語を専門とはしていないが、小学生のことをよく理解し全教科を教えている小学校の担任の先生だからこそできる外国語活動のためには、私が研究してきた内容重視型で多重知能理論を取り入れた教授法を是非活用していただきたいと思いました。実際には、英語と他教科を組み合わせて授業をデザインしたクロスカリキュラムの導入です。その実践として、本学において「小学校英語研修—英語を知って楽しく授業をしよう—」を一昨年より、8月の末に開催いたしました。昨年行われました研修では、「英語の歴史と音声」「英語の発音クリニック」「ワークショップ：英語のコミュニケーションカアップセミナー」「英語の特徴—語と文と意味」「Creative Dramaに親しもう」「Creative Dramaを体験しよう」「第二言語習得と実践的授業展開—クロスカリキュラムの導入と応用」「ワークショップ：授業シラバス作成」と4日間8講座を実施いたしました。クロスカリキュラムの他に小学校の担任の先生の英語力も向上するべきですが、一般に日本で言われている英語力（実は、「英語力」に相当する vocabulary は英語には存在しません）の向上を目指すことが、小学校における外国語教育を担う先生方に重要であるかどうか、まだわかってはいません。ですから、単に英会話の練習とアクティビティのやり方を導入する研修ではなく、2020年度から実施されるコアカリキュラムに沿って、英語という言語の発達（音声）を扱う分野の先生、英語を communication tool として扱う分野の先生、英語の構造的特性を扱う分野の先生、演劇を用いた英語教育を扱う分野の先生、チャンツや絵本を積極的に用いて先進的に小学校で英語教育を実践されている先生にご協力をいただき、小学校の先生方の英語教育の実践へ様々な面からサポートできるように研修会をデザインし、実施いたしました。この取り組みは、まず2018年3月4日、日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会（於：早稲田大学）でのポスター発表、そして『言語学習と教育言語学：2018年度版』（日本英語教育学会、2019年3月刊行予定）への論文掲載という形で、研究業績に発展しました。

Q3：今後の展望などについてお聞かせ下さい。

大学教員が実施する教員研修がどうあるべきかという結論はまだ出てきませんが、大学教員の専門性を生かした各講座では、参加された先生方が様々なことを学ばれた様子が伺われました。今後は、小中連携の英語教育に目を向け、足立区の実態調査、および中学校英語科教員との懇話会を通して、足立区の子どもたちに必要な英語環境（学校が提供できること）はどのようなものであるかを探求し提言していきたいと思っています。

研究紹介

東京未来大学の先生方の研究について、インタビュー形式でご紹介いたします。今回は3人の先生にお話を伺いました。まず、科学研究費の基盤研究(C)に採択された山崎善弘先生です。

Q1 山崎先生、採択された研究のテーマと概要、また主な使い道、計画などがあればお教え下さい。

研究テーマは「姫路藩領における綿業の展開と領主権力・地域社会」です。姫路藩領における綿業については古くから研究されており、特に藩営専売制については先学による優れた研究成果が存在します。ただし、藩営専売制であるにもかかわらず、領主権力の問題が十分に組み込めておらず、さらには、専売制を実現するための現場である地域社会の問題についても十分な分析がなされていません。本研究では、簡単にいえば、そうした従来の研究の問題点を穴埋めする形で、総合的に姫路藩領における綿業政策について考察し直すことを意図しています。



さらに、研究計画について述べるならば、本研究は単に姫路藩領における綿業政策について解明することを意図していません。姫路藩は譜代雄藩であり、特に近世後期には非常に大きな力を保持していた大藩です。その姫路藩が木綿を大量生産し、なんと江戸まで運んで大々的に直接販売していたのです。江戸はいわば当時の首都であるとともに、大消費都市でもありました。理にかなった方法ですが、江戸幕府は全国的な木綿流通統制を行っており、姫路藩の行為を許していませんでした。慎重な考察が必要ですが、このことは、国家公権たる江戸幕府の絶対主義化を阻止する力として働いた可能性があります。そうして、姫路藩領における綿業政策は発展の一途をたどり、日本の近代化における産業革命の一翼を担うことになるのです。今回は代表的な事例として姫路藩領における綿業政策のみを取り上げていますが、今後、さらに事例を加えることで、日本型資本主義の形成・発展のあり方を探れるものと考えています。

Q2 研究計画調書作成にあたってご苦労または工夫された点、アドバイスなどをお願いします。

研究計画調書作成にあたっては、特別苦労した点などはありません。いろいろとその書き方について、近年ではマニュアル本の類まで出版されていますが、要はどのような研究をするのか、その点を専門分野が異なる審査者が読んでもわかりやすいように、かつ具体的に書くことに尽きると思います。もちろん、その前提として、コンスタントに研究成果を発表し続けている必要があることはいまでもありません。

大した研究ではありませんが、近年、私は採択された研究テーマに即した研究成果を、毎年コンスタントに発表していました。なお、研究分野によって異なるでしょうが、歴史学の世界では、著書を発表することが大変重要となります。たまたま著書を発表した年に申請したことが、採択につながる大きな要素となったのではないかと思います。

加えていえば、紀要論文でもよろしいと存じますが、S級やA級などと捉えられる学術雑誌に論文を掲載することも重要と思います。常に私がそうした学術雑誌に論文を掲載しているわけではありませんが、長年、そうした学術雑誌への投稿論文を審査している経験上、掲載されるに至る論文は、やはり質の高いものです。研究計画調書の説得性に影響してくるでしょう。

Q3 研究の進捗はいかがですか？ また今後の展望についてお聞かせ下さい。

概ね計画通りに研究は進められています。今後も研究計画調書に記したとおりに研究を進めていきますが、今年度、研究を進める中で、いろいろと新たな発見がありました。

とりわけ、研究を進める中で、海外の大学が関連史料を所蔵していることを知り、研究テーマの近い外国人研究者との共同研究の話が持ち上がっています。日本史は日本が研究の本場ですが、海外にも日本史研究者は多く存在します。私は彼ら・彼女らとの交流を深めることで、彼ら・彼女らの研究成果に学ぶことはもちろん、日本人研究者では考えられないような発想にも触れ、研究の幅、あるいはその質を深めていければと考えています。

本研究では、経済学者に研究分担者として加わっていただいています。その意味で、本研究は学際的研究なのですが、今後は国際的研究としても進めていければと思っています。

研究紹介

東京未来大学の先生方の研究について、インタビュー形式でご紹介いたします。続いて、科学研究費の挑戦的研究（萌芽）に採択された日向野智子先生のお話です。

Q 1 日向野先生、採択された研究のテーマと概要、また主な使い道、計画などがあればお教え下さい。

この度は私どもの研究に関心を寄せていただきありがとうございます。日向野・藤後・山極・磯・高橋一公・角山の6名で構成される私どもの研究チームは、「潜在保育士の保育士就労促進に対する職場の人間関係と社会的スキルトレーニングの効果」について、平成30年度から3年間の研究助成を受けております。

保育士の有効求人倍率は、東京都で5倍を超えるなど非常に高い状況です。それにも拘わらず、慢性的な保育士不足が解消されないため、資格を持ちながらも保育職に従事していない潜在保育士が注目を集めています。潜在保育士には離職した保育士も含まれていますが、勤務年数1年未満の保育士では、職場の人間関係を理由とした離職（32.6%）が他の理由による離職（仕事内容への不満・健康上の理由、いずれも23.3%）を大きく上回る（日向野他, 2018）ため、職場における人間関係構築力やコミュニケーションスキルを高めることにより、継続した保育士就労が促される可能性があります。ですが、潜在保育士の（再）就職支援における主たる取組は、保育実技や安全、保護者対応に対する研修が主であり、職場の人間関係やコミュニケーションに着眼した取組はわずかです。また、コミュニケーション能力とワーク・モチベーションとの関連から、潜在保育士の就労促進効果を検討する心理学的研究もこれまでなされていないようです。



そこで、私どもの研究では、潜在保育士の就労を促進する心理学的要因を明らかにするために、潜在保育士と現職保育士および保育士養成校の学生を対象とし、コミュニケーション能力が職場の人間関係に対する不安を低下させ、保育士ワーク・モチベーションを高め、潜在保育士の就労を促進するという仮説モデルを立て、コミュニケーション能力の向上のための社会的スキル・トレーニング・プログラムの作成と検証を行うことを目的としています。

Q 2 研究計画調書作成にあたってご苦労または工夫された点、アドバイスなどをお願いします。

実は、3度目の正直ならぬ4度目の正直で採択されました。4度とも、「保育士のコミュニケーションスキルが就労意欲を促進する」という点は共通していますが、3度目までは、「コミュニケーションスキル⇒ワーク・モチベーション⇒就労促進」というモデルでした。それを4度目の挑戦では、「コミュニケーションスキル⇒職場の人間関係の不安・ストレスを緩和⇒就労促進」という、職場の人間関係に着目したモデルに変更しています。他の職種に比べて保育士の早期離職率が高いこと、またその原因として職場の人間関係が挙げられることが複数の研究から明らかになっているため、そういった問題に関わる研究計画であることが採択の可能性を高めたのかもしれませんが。また、科研の研修会やご採択経験のある先生方にご指導いただきました通り、同じ研究計画でも審査者が異なれば評価が異なることを念頭に、「見やすい研究計画書」と「研究実績・研究実施の実行可能性」を押さえたうえで、数回はチャレンジする価値があるということを実感しています。

Q 3 研究の進捗はいかがですか？ また今後の展望についてお聞かせ下さい。

あまり芳しくありませんが頑張っています。2019年1月から2月に、保育施設の施設長10名を対象とし、保育士間の良好な連携を導くコミュニケーションとはどのようなものであるのかについて、ヒアリング調査を実施しました。都内だけでなく、仙台や沖縄などの地方でもヒアリングを実施しています。2019年度は、現職保育士、潜在保育士を対象とし、保育士間の良好なコミュニケーションスキルを探るためのWEB調査を行います。調査結果を踏まえて、保育士間の人間関係構築力、コミュニケーションスキルを高めるためのスキルトレーニングを計画・実施し、2020年度には、コミュニケーション能力が職場の人間関係に対する不安を低下させ、保育士ワーク・モチベーションを高めることにより、保育士の就労を促進するかどうか、仮説モデルの検証を行います。最終的には、保育士の保育職就労を促進するための効果的なコミュニケーションスキル・トレーニングの提案を目指しています。

私どもの研究は心理学的視点から保育士のコミュニケーションについて検討しています。保育士養成を担うお立場で現場・現実を熟知されている保育・教育専攻の先生方には、是非ともご助言を賜りたくよろしくお願い申し上げます。この度は私どもの研究をご紹介いただき、誠にありがとうございました。

研究紹介

東京未来大学の先生方の研究について、インタビュー形式でご紹介いたします。最後に、科学研究費の研究活動スタート支援に採択された野中俊介先生のお話です。

Q 1 野中先生、採択された研究のテーマと概要、また主な使い道、計画などがあればお教え下さい。

採択された研究テーマは、「ひきこもりの改善を目指した家族支援における認知行動療法的プロセス変数の包括的検討」です。私は以前からひきこもりの人や、そのご家族への心理的支援に関心をもっており、今回は、ご家族を対象として、「家族にどのような心理行動的变化が生じると子ども（といっても30~40代が中心ですが）のひきこもりが改善するのか」ということを心理学的な手法を用いて調べることを目的としています。

いただいた助成の今年度の主な使い道は、まずは地方の家族会への調査依頼にかかる旅費があります。ひきこもりの人のご家族を対象として、ある程度の大きなサンプルサイズが必要な研究をしておりますので、家族会の会員の方に協力を依頼することが多いのですが、それでも関東近郊だけでは不十分なので、地方の家族会のなかから比較的大きな規模の家族会を中心に依頼をしています。その際、やはり可能な限り直接お願いに伺うことが適切に研究を実施するうえでも相手に対しても大切だと考えており、そのように計画しています。

また、家族会のみではどうしてもさまざまな偏りが生じてしまいますので、インターネット調査によっても協力を依頼しており、その費用が必要になります。研究上、「ひきこもりではない人」との比較も必要なので、その比較対照の方の協力もインターネット調査によって依頼しています。それ以外には、英文校正費、調査用紙製本費、面接調査時に必要なICレコーダーなどにも使用しています。



Q 2 研究計画調書作成にあたってご苦労または工夫された点、アドバイスなどをお願いします。

工夫した点は大きく2つあります。1つは、研究目的の必然性が可能な限り明瞭になるように工夫したことです。私の研究は心理学のなかでもかなりマイナーな分野だと思いますので、専門分野が多少異なる方にも可能な限り理解していただきやすくなるように、先行研究と今回の研究目的を意図的に対比させながら、研究仮説のストーリーの記述を工夫したつもりです。実際にどこまで狙い通りに記述できたか分かりませんが、たとえば今回の研究計画調書では、「これまでは暗黙のうちに、家族支援に必要なことはAであると考えられてきたが、実際にはAというよりもBの方が重要なのではないか」というようなことを、根拠を示しながら明記するように心がけました。

2つ目は、研究が予定通りに進まなかった場合の対策をあらかじめ記述しました。今回の研究は、複数の研究から構成されておりますので、前半の研究で予想通りの結果が得られなかった場合でも、研究全体が止まってしまうのではなく、「前半の研究で仮説とは異なる結果が得られた場合には、後半の研究では~のように工夫することができる」というような対策を明記するように心がけました。

その他には、これまでに全国規模のひきこもり家族会と連携して実態調査を行ったり講演を行ったりといった現場とのつながりを有しているということも、今回のような研究では重要なことだと思いますので、そのような「自分だからこその研究だ」というアピール（あくまでアピールです）も工夫した点といえるかもしれません。

Q 3 研究の進捗はいかがですか？ また今後の展望についてお聞かせ下さい。

おおよそ順調に進めることができていますが、進めるなかであらたな課題が生じたり、思うようにできなかったりすることもあり、すべて予定通りに進んでいるわけではありません。

今回の助成は2年間のものということもあって、今後のことについても展望を考えなくてはいけないと思い始めています。アイデアはいろいろ浮かんでくるのですが、何がもっとも良さそうか（役に立ちそうか）を考えていると迷うことばかりです。できれば、ウェブを使った心理的支援の基礎になる研究をしたり、ひきこもりの予防に取り組んだり、社会経済的あるいは文化的背景が異なる外国との比較をしたりなど、いままで取り組んできた心理的支援の研究だけでなく、もう少し幅広く取り組み、そのなかで関連分野の研究者の方たちとの連携を進めていきたいと考えています。

平成 30 年度 東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）

平成 31（2019）年 2 月 27 日（水）、平成 30（2018）年度東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）が開催されました。午前 10 時、B-321 教室での近藤俊明副学長による御挨拶に続いて、B-321 教室で心理系、B-327 教室で非心理系の発表が行われました。全 13 件の発表は、前回の 11 件を上回り、年々、本学の研究活動が活性化する現実を実感する好機となりました。以下に、今回ご発表いただいた先生方のお名前と申請課題（発表タイトル）を紹介いたします。

B-321 教室

| 氏名 | 申請課題 |
|----------------------|--|
| 鈴木公啓 | 身体と装いの自他への影響とその心理機序（2） |
| 平部正樹（藤後悦子、藤本昌樹、小林寛子） | 通信制高等学校生徒の QOL 向上のための総合的支援に向けた調査研究 |
| 大橋 恵（井梅由美子、藤後悦子） | 小学生時のスポーツ・ハラスメント被害が動機づけ、自己評価等に与える影響の検討および指導者向け教材開発 |
| 藤後悦子（篠原俊明、井梅由美子、大橋恵） | 小学生の地域スポーツにおける合理的配慮 |
| 近藤俊明（出口保行） | 小・中学校における不登校の機能分析に基づく予防的介入の効果の研究 |

B-327 教室

| 氏名 | 申請課題 |
|------------------------|---|
| 山崎善弘 | 近世日本における中間層と地域社会に関する総合的研究 |
| 大西 斎 | 学校教育における教育権の再構築についての研究 |
| 小林久美 | 子どもの衣服の安全性に関する教育者・保育者の認識 |
| 鈴木哲也 | 戦前及び戦後の学校飼育動物の歴史的負荷課題 |
| 森 薫 | 子どもの音楽学習における替えうたの創出・共有とその意味 |
| 金塚 基（岩崎智史） | 高等学校応援団の活動・役割・意義に関する教育学的研究 |
| 田中真奈美（馬場智子、吉田直子、奴久妻駿介） | 外国人児童生徒の多様な教育的選択の変遷に関する考察—日本・米国・タイの事例より |
| 郭 潔蓉（金塚基、森下一成） | 多文化「共創」社会における人財マネジメントと組織運営 |



発表風景：B-321 教室（心理系）



発表風景：B-327 教室（非心理系）

編集後記

今年度は昨年度にも増して、東京未来大学特別研究助成研究発表会での発表者が多く、昨年度同様、2 会場に分けての開催となりました。充実した発表会となったことは言うまでもありません。近年の科研費採択率の上昇と併せ、本学での研究が一層推進されていることを物語っていると言えます。今後さらに、本学での研究が推進されることを期待しています。